

## 〈2〉街なかの賑わい創出に向けて —大学と連携した通行量調査と

### 今後の活用について—

地域政策室 室長補佐 松本 剛

## 1 はじめに

宇都宮市（以下「本市」という）では、都市拠点にふさわしい機能の集積や誘導など「賑わいの基盤・環境づくり」を行うとともに、賑わいを創出し、地域経済活動の主役である民間による創意工夫を活かした取組を推進するために、第2期中心市街地活性化基本計画に基づいて、各種活性化事業に取り組んでいるところである。同計画の将来像として、「誰もが暮らしやすく活力と賑わいあふれるまち」の実現をめざしていくためには、日常的に人々が行き交い、街なかならではの魅力と賑わいあふれるまちづくりを進めていくことが必要である。

## 2 目標指標の設定の考え方について

中心市街地の活性化や賑わいを把握するための指標としては、店舗の売上高や地価の動向が考えられるが、店舗の売上高は毎年公表されるものではなく、また、地価も景気の動向に影響を受けやすい。このため、本市においては、「街なかならではの魅力と賑わいあふれるまち」の到達度に関する指標として、歩行者・自転車通行量（以下「通行量」という）を設定し、多くの人が街なかの魅力に触れ、回遊している状況について、人の集積度合い、交流人口及び回遊性を定量的に計測し、賑わい度を把握している。

## 3 商店街通行量調査について

中心市街地の通行量調査については、昭和 56

年より本市と宇都宮商工会議所の共同で行っている。この調査は、例年、夏休みが始まった直後の7月下旬の日曜日および月曜日の午前10時から午後7時までの時間帯で、有人調査により実施しており、2年に1度の隔年で通行量を把握している。

しかしながら、調査日は2日間のみであり、調査時間も限られているため、通年での歩行者の動向や、夜間などの調査時間以外の時間帯における通行量の把握ができず、全体的な回遊状況を把握できないこと、また、調査実施時の天候やイベント開催の有無等により、通行量が大きく変わり、調査結果に影響を及ぼしてしまうことから、まずは、通行量の実態をより詳細に把握していく必要があるものと考えていた。

## 4 大学との共同研究について

このような中、宇都宮大学が平成26年度から、独自に赤外線による通行量自動計測器<sup>1</sup>により、JR宇都宮駅やオリオン通りにおける通年の通行量を調査していたことから、平成28年度に本市も同大学に協力する形で、オリオン通り等6か所で通行量の測定を実施した。さらに、同年度に国の地方創生推進交付金を活用し、中心市街地のオリオン通り周辺のセンターコアにおいて、「街なかの新たな賑わいづくりによる地域創生事業」を実施するにあたっての効果を測定するために、本市も通行量自動計測器を購入し、宇都宮大学との共同研究事業として、賑わい効果の測定に係る調査研究を実施することとした。

なお、調査研究にあたっては、通年にわたる曜日・時間帯別の通行量のほか、イベントなどの実施により、通行量がどの場所で、どの程度

<sup>1</sup> 計測器内部に設置されているセンサーユニットが、人体から放出された熱を感知し、同時に異なる2方向の人々の通過を検知することで、通行量を記録している。

増加しているのか、また、そのことにより、店舗への来客や売上にどの程度の影響を及ぼすのかなどについて検証することとした。

## (1) 自動計測器の設置箇所について

センターコアにおける回遊状況を常時把握するために、8か所を常設的な設置箇所<sup>2</sup>にするとともに、イベント開催時の回遊状況を把握するために、6か所をローテーションによる設置箇所<sup>2</sup>とし、通年での通行量を測定している(図1・写真1)。

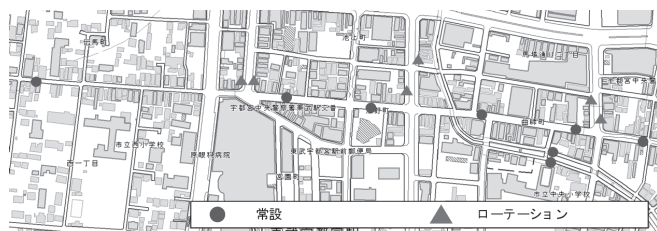


図1 自動計測器の設置箇所

宇都宮市作成



写真1 釜川ふれあい広場に設置した自動計測器

宇都宮市撮影

## 1) 常設設置

- ・オリオン通り4か所
- ・釜川ふれあい広場2か所
- ・ユニオン通り1か所
- ・日野町通り1か所

## 2) ローテーション設置

バンバ通り、シンボルロードおよび東武馬車道

通りの通行量については、おおむね10日間の間隔で、自動計測器をローテーションにより設置し、バンバ広場や東武宇都宮駅周辺など、オリオン通り以外のエリアにおけるイベント開催時の通行量の変化と、イベントの開催によるオリオン通りと大通り間の通行量の流入・流出量を測定している。

## (2) 研究成果について

### 1) 曜日・時間帯別による通行量

図2に、オリオン通り曲師町の曜日別・時間帯別の通行量を示す。平日の通行量については、金曜日の15時以降に、顕著に増加している。また、金曜日と土曜日の夜間の通行量については、他曜日と比較すると、大幅に多くなっており、特に土曜日の夜から日曜日の早朝は、平日の昼間と同程度の通行量がある(写真2)。

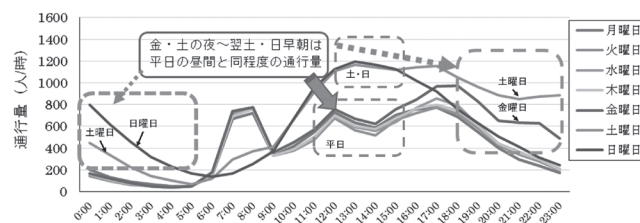


図2 オリオン通り曲師町の通行量

宇都宮大学作成資料に筆者加筆



写真2 夜間におけるオリオン通りの様子

宇都宮市撮影

このことは、オリオン通りの空き店舗が減少し、深夜まで営業する飲食店を中心として、新規の出店が増えていることによる影響と思われる(表1, 2)。

<sup>2</sup> ローテーションにより2か所ずつ設置している。



表1 空き店舗数の推移

| 年月    | H27. 4. | H28. 4. | H29. 4. |
|-------|---------|---------|---------|
| 空き店舗数 | 57      | 48      | 42      |

宇都宮市中心市街地空き店舗情報システム  
(宇都宮まちづくり推進機構) から作成

表2 中心商業地新規出店促進事業補助金の実績

| 年度 |     | H27 | H28 | H29 |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 合計 |     | 26  | 21  | 14  |
| 内訳 | 小売業 | 5   | 7   | 2   |
|    | 飲食業 | 14  | 11  | 10  |
|    | その他 | 7   | 3   | 2   |

補助金実績 (宇都宮商工会議所) から作成

## 2) イベントの開催による通行量への影響

イベントの開催による通行量への影響について、オリオンスクエアやバンバ広場でのイベント開催時においては、オリオン通りに近接した場所ということもあり、通行量が増加していることが改めてわかった。また、オリオン通りから700 mほど離れている宇都宮城址公園でのイベント開催時においても、オリオン通りの通行量が増していたことから、そのイベント来場者が回遊していることが推察された。

なお、釜川でのイベント開催時においては、隣接するオリオン通りの通行量の増加につながっていなかった。これは、釜川においては、普段の通行量が少なく、また、開催されるイベントが比較的小規模であることなどが考えられる。

## 3) オープンカフェによる通行量への影響

平成29年度から実施しているオープンカフェ事業<sup>3</sup>により、9月から11月におけるオリオン通りの週末夜間の通行量については、平成28年度の約13,400人から平成30年度には約16,200人となり、約2割増加している。

<sup>3</sup> 来街者の誰もが、飲食や休憩ができるよう、店舗前にテーブル・椅子・パラソルを設置し、交流と憩いの場を提供するなど、魅力的な空間を演出している（事業主体：NPO法人 宇都宮まちづくり推進機構）。

## 4) 通行量の増加による店舗の売上への影響

一部の店舗からの聞き取りによって、通行量が増加することにより、来客者及び売上（以下「来客者等」という）が全体的に増加していることが確認された。

ただし、この店舗においては、通行量が増加することにより、飲食部門における来客者等は増加しているものの、物販部門においてはそのような傾向はみられなかった。このことから、通行量の増加が全ての業種の店舗において、来客者等の増加に直結するとは言い難い。

## 5 今後の活用方針について

現状の自動計測器の測定内容については、主にオリオン通りにおける東西の人の流れの把握に留まり、二荒山神社周辺の大通りやJR宇都宮駅周辺からオリオン通り周辺のセンターコア<sup>4</sup>にかけての人の回遊状況の把握ができていない。

今後は、センターコアの入口となる二荒山神社前の交差点周辺に、新たに自動計測器を設置し、二荒山神社、大通り、オリオン通り、釜川周辺、東武宇都宮駅周辺などのセンターコア内における人の回遊状況について、詳細に把握していくことを検討している（図3）。

本市では、デスティネーションキャンペーンを契機とした餃子通りの整備などによって観光客が増加しており、また、LRTのJR宇都宮駅西側延伸も検討されている。このような状況において、JR宇都宮駅からセンターコアへの回遊性を高め、人が歩いて楽しめるような中心市街地のまちづくりを進めていくための有効な施策を企画・立案するにあたって、人の回遊状況のデータは欠かせないものであると考えられる。

<sup>4</sup> 宇都宮市都心部グランドデザイン（2002）において位置づけられた本市の都市核の1つ。

また、東京都中野区では、画像解析機能を搭載したカメラにより、商店街を行き交う人の顔を認証するなどして、年齢、性別などの属性を解析し、商店街に訪れる客層を分析し、その結果を商店街へフィードバックすることで、効果的な誘客策や販促活動に資する商業振興策への活用のほか、シティセールスおよび観光プロモーション活動への活用に向けた実証実験を行ったところである。

本市においては、たとえば、商店街が設置している防犯カメラに記録されている画像を解析して、商店街に訪れる属性等を分析することで、顧客層に合わせた販促活動を展開していくことができる。また、オリオンスクエアを中心として恒常的にイベントが開催されるようになってきている中、イベント主催者が集客力のある効果的な催事を企画するための方策や、商店街とイベント主催者が連携し、一体となって相乗効果を生み出せるような商店街振興策への活用方法を検討していきたい。

## 6 おわりに

本市のめざすネットワーク型コンパクトシティにおいては、都市拠点として位置付けされている中心市街地と地域拠点を利便性の高い公共交通で結び付けることによって、交流人口を増加させ、賑わいを向上させていくことが求められている。

中心市街地には餃子、カクテル、ジャズをはじめ、カトリック松が峰教会や数多くの大谷石蔵と、大谷石蔵を改装したお洒落なカフェ、レストランのほか、街なかを流れる釜川の潤い空間といったさまざまな地域資源がある。

このような中、平成30年5月に本市の大谷石文化が、日本遺産の認定を受けたことから、これらの地域資源を磨き上げて、魅力と特色あ

るエリアを創出していくための取組をより一層推進していく必要がある。このことにより、インバウンドや観光客など、市内外からの来訪者の回遊性が高まり、街なかの居住者や事業者との間に新たな交流が生まれ、賑わいが創出されることにより、街の活力が増強することとなる。今後とも、街なかの魅力を積極的に情報発信し、多くの人が公共交通や徒歩で回遊し、歩いて楽しめるような宇都宮らしい多様性と魅力を備えた都市拠点の形成をめざしていきたい。

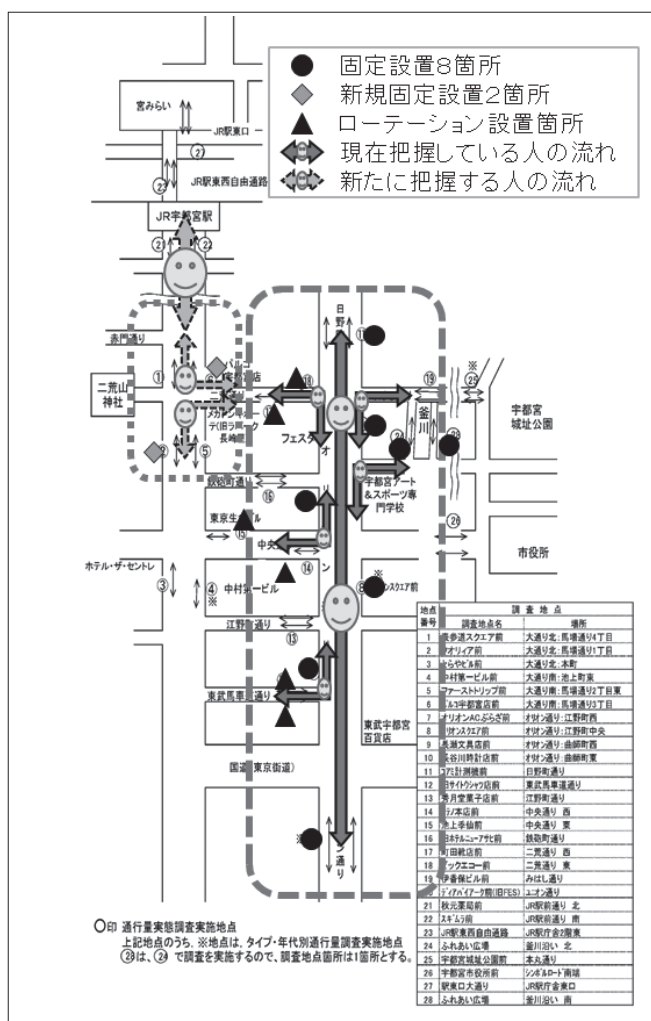


図3 通行量の測定箇所

宇都宮市作成